

る。

今回は縦書きにしてある。二色刷りにしたためにソフトな雰囲気になったが、年と地名が欄外に出て淡い色になったためにやや印象が薄くなっている。連載の時のような二つの記事の組合せの面白さは消えている。西洋編(二三四題)東洋編(五五題)日本編(八二題)と三つに分類して時代の順に並べ変えたからである。人物については生年没年の他に簡単な解説が欄外についていたことで、医学史に詳しくない人々にも親しめるような配慮がされている。偉大な人物の意外な面を知ることができるのである。

内容は連載の時のものにあまり手直しをしないでそのまま再録されたようだが、私の記憶ではもっと沢山あったはずである。一部省略されたのだろうか。

やや困ることといえは東洋編で人名地名に読めない字が出てくることである。所々にはルビが振ってあるが、医学史に親もうと思つて本書を手取る人に解りやすい道しるべを作つてやりたいものである。やわらかな文体で読む貴重なチャンスだと思えたからである。

日本編では漢方の処方の方が人物より主役を占める所がある。漢方の雑誌の記事であるから、そのくらいの知識は当然という前提のもとに書かれているのだろうが、これが意外に難物である。日本の医学史が西洋医学の影響ばかり取上げて欧米の医学に追いつく姿に注目してしまうのは、漢方処方のとりにつきにくい名前が邪魔をしているのかもしれない。明治

以前の医学を漢方が支配していたのだから、これについても触れなければいけないのに、一部の専門家以外は東洋医学史を語れなくなっている。これを機会に大いに勉強したいと思つた。

全体を通して、これは医学史入門者にとつても役立つ、ある程度の知識を持った人々にとつても有意義に楽しく読める書である。取材に行った記者が感想を述べるふりをして、大塚先生の批判精神がイキイキと表現されていることに感銘を受けるにちがいない。

(大村 敏郎)

〔臨床情報センター・東京都千代田区六番町三、電話〇三一一三二
二一一一八七二、四六判、二七八頁、定価二二〇〇円〕

岩田 誠著『ペーララシエーズの医学者たち』

医師の群像をまとめる場合、時代・地域・専門分野・師弟関係など色々なまとめ方がある。その特異なものとして、今回同一の墓地に埋葬されている医学者を取り上げた珍しい書物が世に出た。著者の岩田誠氏は神経内科の専門家で現在東京女子医大の教授である。

二十余年前留学中のパリで、墓地案内書を手にながら有名人の墓参りに通うことになった同氏は「探し当てた墓の前に立つと、そこに眠っている人物が実在感をもって私の前に現れ、自らの生きた人生を語ってくれるように思われてなら

なかつた。」と述べている。これが連載で『生命の科学』に載り、改めて一書になつたのである。

墓地を語る時、目標とする偉人の墓をさがす人は少くない。しかし限なく墓地内を歩いて同じ分野例えば医師だけを訪れて歩くとなれば余程の執念がなければならぬ。

医師だけの墓地ではないし、著名人のみを集めた場所でもない。だから多くの医師に巡りあうためには墓地が広大なものでなければならぬ。パリの東部二十区にあるペール・ラシェーズは規模といい収容人数といい、埋葬されている人々の知名度といひ超一流の墓地である。

革命から十五年たつた一八〇四年、わが国では華岡青洲が内服の全麻下で乳癌手術の第一例を手がけた年であるが、この年から墓地として使用されるようになった。改革後なのに絶対王制の花形ルイ十四世の聴聞僧であつたラシェーズ神父の名で呼ばれている。ここには九十万人以上が葬られているという。広さは四十ヘクタール以上ある。

本書の表紙カバーはペール・ラシェーズ墓地の地図を背景に、黒い十字架が中央を占めている。目次ではプロローグからエピソードの間に三十人の偉大な医学者が名前を並べている。一見無秩序な並び方だが、これは訪ねて歩く道順になつてゐることがユニークである。墓地の区分の拡大図には墓石のある場所が示してあり、墓石の写真、生前の本人の写真や業績にまつる絵などが多く収録されており、名前だけでなく知らない古い偉人に親しみを感ずることが出来る。

ペール・ラシェーズ墓地は丁度岩田氏と同じ頃私も何度となく訪れた所である。医学史の入口としては最高の舞台である。留学中、フランスの医師たちの書くカルテは日本の場合以上に解説が大変であつた。それに比べて墓石に刻まれた文字はどれも明解で判読が容易であつた。新しい知識を得、親しみを覚え、その上日頃のストレスの解消になつたのだから、墓地巡りは忘れられない思い出になつてゐる。

今回『ペールラシェーズの医学者たち』を読んで、その多くは私自身もその前に立つた墓であつた。なつかしさと涙がこみ上げてくる思いだつた。私の滞在中にはまだ出版されていなかったよゐ案内書に恵まれて、自分の足と体験に基づく見事な解説にまとめあげた岩田氏の努力に心から敬意を表したい。とかく縁が遠いと思われていたフランス医学を身近に感じさせる点でも、また岩田氏の専門である神経領域を学ぶ人々にとつてパリへ行かねばと思わせる点でも最高の書であらう。

(大村 敏郎)

〔中山書店・東京都文京区白山一ノ二五ノ一四、電話〇三三三八
一三一—一〇一、B6判、一八二頁、定価一八〇〇円〕